



九条の樹

108号
2024年9月発行

発行：東久留米「九条の会」 連絡先：Tel. 042-473-9489 (鈴木)
http://higashikurume-9.net/ メール：higashikurume9j@gmail.com



国民の知らない 「憲法審査会」?

メディアが関心を持たず、まとも

にも報道もしないため、国会の「憲法審査会」で憲法「改正」の大喝が行われていることなど、多くの国民はまったく知らない。

憲法審査会って何？

憲法改正を一番の使命とした安倍元首相が第一次安倍内閣のとき、2007年国会法改正を強行して設置された憲法審査会。「与野党の合意で運営する」などの取り決めもある。何年も機能してこなかったが2021年以後、維新、国民民主党が、それまでの野党ポーズをやめて改憲を主張し始め、自公と改憲ブロックを組んで以来激しく動き始めています。

議員任期延長改憲とは？

昨年12月自民党は憲法改正の条文案作りを提案。具体的に求めたのが「議員の任期延長改憲」。災害など緊急事態が発生し、選挙が困難な場合任期を延長しようというもの。

改憲5会派の主張する国会議員の任期延長とは
①我が国に対する外部からの武力攻撃

②内乱等による社会秩序の混乱
③地震等大規模自然災害

④感染症のまん延、その他これに匹敵する事態において適正な選挙実施が困難な場合に内閣の判断により、半年、または1年、国会議員の任期延長を認める改憲をす

る、というものです。

これは「武力攻撃」などを憲法に書き込むなど、改憲の本丸である9条改憲への呼び水にしようというものです。また任期延長自体が、乱用される恐れのある危険なものです。本来なら4年に一度ある衆議院選挙で議員を選ぶ権利が国民にあります。この権利を制限するものです。外国でもトルコ、インドネシアなど、大地震の時も選挙は行われています。

岸田首相は退陣表明直前に「憲法9条への自衛隊明記、緊急事態条項の設置」などの改正案提出を党に求めました。

自民党総裁選にむけて9条改憲を競わせようとする意図があると指摘されていますが、審査委員からは「9条については憲法審査会でまったく話されていない」とも言われています。

(東久留米九条の会事務局)

日本と中国の戦争を考える

南京爆撃

戦後79年の今年、今では多くの人が実際の戦争を体験していません。

終戦特集のテレビなどを見ていると過去の戦争と言えば太平洋戦争のことで、真珠湾攻撃から始まったと、錯覚させられます。

「台湾が中国に攻められたら、戦う覚悟が必要だ」と麻生副総理が叫びました。すでに沖縄の島には島民より多い人数の自衛隊員が配備され、ミサイル基地化が進められ、戦争準備が始まっています。今から87年前、日本と中国との戦争がどう始まったのか、改めて考えてみます。

日本軍が中国軍と衝突したのは1937年（昭和12年）7月7日、北京郊外盧溝橋（ろうこうきょう）でした。現地で停戦協定ができたものの、華北で日本軍が総攻撃、8月13日には上海で両軍が戦闘開始、そして15日に日本海軍機が当時の中国の首都南京に渡洋爆撃を行いました。

その日、在南京日本大使館員、居留民が中国政府の用意した特別列車で護衛の40名の憲兵をつけて青島へ向け発車していました。爆撃はその3時間後でした。日本海軍機は20機、500メートルの低空から市内各所を爆撃、飛行場、公園、住宅密集地に60キロ爆弾を投下。40分続いた爆撃で図書館、生物研究所などの蔵書の大半が焼失し、軍人、市

民の死傷者数十名の犠牲を出生しました。

その後、日本海軍は夜間爆撃を繰り返して南京市民を苦しめました。8月27日には午前1時40分、2時20分、4時ごろと真夜中から明けがた、市内3ヶ所で火災が発生、およそ1000人の市民が死亡しました。

連夜の空襲は夕食後、真夜中、深い眠りに入る2時ごろ、さらに未明の4時ごろと定期的に襲来する爆撃機に南京市民の眠りは奪われました。



南京の城壁

今、ガザに対するイスラエ

ルの空爆が世界から非難されていますが、同じことを日本がやっていたのです。

上海攻撃直後、南京への渡洋爆撃を行ったのは日本海軍が早い時期から想定、訓練を行っていたからです。

宣戦布告なき爆撃

戦時国際法の「開戦に関する条約」（日本、中国も批准）は「理由を付したる開戦宣言の形式または条件付き開戦宣言を含む最後通牒の形式を有する明瞭かつ事前の通告なくして、その相互間に、戦争を開始すべからざる」と定めています。またハーグ陸戦条約（いづれも1907年）は「防守せざる都市、村落、住宅または建物はいかなる手段によるも、これを攻撃または砲撃することを得ず」とあります。日本海軍の南京爆撃は非戦闘員殺

傷、非武装地域への爆弾投下により同法違反でもありました。

南京攻撃 大殺戮

上海で日本陸軍が攻撃を始めたのが8月13日(第2次上海事変)。上海を制圧したのが11月中旬。日本の大本営が南京攻略を正式命令したのは12月1日です。

南京攻撃を命じられた主力



は上海派遣軍です。上海攻略戦は、中国軍の激しい抵抗にあい予想以上に苦戦しました。3ヶ月にわたる戦闘で疲れ切った兵士を南京に向かわせたのです。上海から南京までは東京から名古屋ぐらいの距離でした。しかも軍の補給はなく食料などは現地調達というところで途中の村落から略奪しながら進みました。そのことが南京大虐殺と言われる日本軍の行動につながった、と指摘されています。

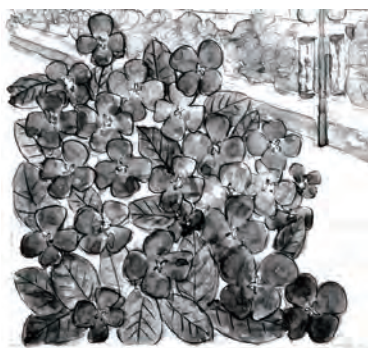
それから日本軍は重慶など奥地へ奥地へと追撃、戦闘が続いてゆきます。

誰が戦争を

拡大させたのか

北京での衝突が起きたとき日本の政府、参謀本部は不拡大の方針で、現地で停戦協定

もできていました。陸軍内部でも拡大派と不拡大派の対立がありました。盧溝橋事件をきっかけに拡大派が指導権を握っていききました。内閣や参謀本部の中には不拡大派もいましたが、近衛首相や広田外相らは、「このさい中国に強大な一撃を与えて懸案を一挙に解決」しようという拡大派でした。天皇もソ連の動きを気にしつつも拡大派の立場に立っていました。



平和の花「柴金草」

7月27日、内地の3個師団に、北支への派遣命令が出されました。この命令は支那(中国)派遣軍に対し「平津地方

の支那(中国)軍を膺懲」せよと言っています。

「膺懲(ようちよう)」とは「敵に大打撃を与え、二度と戦争ができないよう、こうしめること」(新明解国語辞典)

それまでの支那(中国)派遣軍の任務は北京と海港との交通の確保と居留民保護でしたが、この命令で中国軍の撃滅および、北京、天津など華北要地の占領が任務とされたのです。

上海陥落、南京陥落のたびに銀座では勝利を祝ううちょうちん行列が行われました。軍部だけでなく一般庶民も戦争拡大の流れに飲み込まれていき、日本中が戦争一色になっていったのです。(鈴木)

笠原十九司「南京事件」(岩波新書)、藤原彰「昭和天皇の十五年戦争」(青木書店)などを参照しました。

私の子ども時代

相沢康之（南沢）

私は太平洋戦争の始まる一ヶ月前の一九四二年十一月に母の実家、静岡県下田市で誕生、二ヶ月後父の実家、新潟県柏崎市に転居しました。父の祖父が肺結核に感染し、その看病と家業の手伝いに母が行くことになったのです。出産後二ヶ月の乳飲み子を含め子ども四人を連れての行動は今考えると無謀というほかありません。この祖父の看病がその後の私の人生を大きく変えたように思います。母の看病の甲斐もなく二年後に祖父が死亡し、再び下田市に戻りました。その後、私を除く家族四人が結核に感染。母は重病で、私が四歳の時に三十四歳で亡くなりました。戦時中のため大流行だった結核を防ぐことも、結核の薬も、栄養となる食料も乏しく散々な時代でした。

その後家族で埼玉県浦和市に

転居。戦後の混乱の中、衣食住の確保が大変な時代でした。

一九四八年、私が小学校一年生の時、二番目の姉も結核で死亡。父と長女は結核に侵された肺の手術で、兄は要注意など、私以外すべて肺結核でした。私が小学校四年になったとき、病弱だった父がキリスト教信者だった女性と再婚。我が家にも新しい母親が来たのです。

四月に入って、新しい女性担任、菅先生の家訪問は忘れることができせん。どうせ、私の学校での問題を指摘されると思い、反抗して外に出て行ってしまいました。母と担任との話しが終わったころ、家に戻ると二人は涙を流しながらまだ話をしていました。私が戻るなりすぐ担任は帰りました。話の内容は聞きませんでした。

一九五四年私が中学生になったときに、初めて母親が自分の経歴とあの時の話をしてくれました。「私は結婚し夫、娘二人息子と生活していましたが、夫

は結核で亡くなり、三人の子どもも結核で次々亡くなった」「菅先生も夫が戦死、子どもも結核で亡くなり独り身」という話でした。この時から私は、周りの人々の話もよく聞き考えるようになりました。

母は、いつも「戦争は絶対に起こしてはいけない。戦争はあらゆる面で、正常な日常生活を壊してしまう。大流行の結核も防げず、徴兵制で一家の大黒柱も取られてしまう。戦争は天災でなく人災」と言っていました。当時、国民の中に二度とあの悲惨な戦争を起こしてはいけないという世論ができていました。文部省から「新しい憲法のはなし」の冊子も（一九四七年）発行されました。「教え子を戦場に送るな」というスローガンも聞こえてきました。

（年金者組合東久留米支部発行「戦争を語りつく」から転載、短くさせていただきます）

◆平和を考える本◆ 『女の国会』

（新川帆立・著／幻冬舎）

定価1800円＋税



与党第一党の国会議員、「お嬢」こと朝沼侑子が自殺した。

彼女とは何かと敵対し、「憤慨おばさん」と呼ばれている野党第一党の高月馨は、朝沼の死の責任を云々されるが、実は、ある法案に関しての思いを同じくしていた。——性同一性障害特例法の改正案を通すこと。

朝沼には遺書のようなメモが残されていたが、高月は納得できない。高月と新聞記者の和田山は、それぞれの理由から朝沼の死の真相を探り始める。さらに、高月の秘書と地方議員も巻き込んで、女性4人による真実の探求が始まる。

それにつれて、大物政治家の死や古めかしい後継者争いの真相が次々に暴かれて行く。

（高田桂子）